裏表紙

電子アンケートにご協力をお願いいたします。
▶https://forms.gle/boJ4QCCgByxKr3xz6
みなさまのご感想やメッセージをぜひお聞かせくださいませ!!

2022年10月10日発行
THANKS CONCERT事務局
office.kanrekidayo.ms59th@gmail.com

表紙

鈴木正人
THANKS CONCERT
―還暦直前記念演奏会―

2022.10.10
府中の森芸術劇場

裏表紙

電子アンケートにご協力をお願いいたします。
▶https://forms.gle/boJ4QCCgByxKr3xz6
みなさまのご感想やメッセージをぜひお聞かせくださいませ!!

2022年10月10日発行
THANKS CONCERT事務局
office.kanrekidayo.ms59th@gmail.com

表紙

鈴木正人
THANKS CONCERT

―還暦直前記念演奏会―

2022.10.10
府中の森芸術劇場

Greeting

指揮　鈴木　正人

「還暦」とは干支が一巡し誕生年の干支に還る。ということらしい。
だが私にはそんな実感は全くない。いつも29歳と言い続けてきたし、何となく還暦＝年寄りのイメージが自分の中で受け入れ難い事実であるからだと思う。しかし体力が落ちたなと感じる瞬間は確実に増えているのも事実。

さて本日は今まで私と共に音楽を創造してくれた仲間たちが大集合してくれるという。気がつけば私も22歳で明治大学付属明治高等学校に奉職し、37年間も吹奏楽班の生徒たちと過ごしてきた。明治の場合中学1年生から6年間の付き合いをした生徒は実際の家族より私と過ごした時間の方が長いという子がたくさんいる。だから私は「バンドは家族」だと考えている。また卒業した子たちは皆本当に優秀で尊敬に値する。立派な就職先もそうだが、多くの卒業生が今でも楽器を続け、各地のオーケストラや吹奏楽団でコンサートマスターや首席奏者として演奏している。そんな卒業生が仲間として、いや家族として戻って来てくれるという。身に余る光栄。ありがたいことだ。

そして東京正人吹奏楽団のメンバーたちも前回2017年に天野正道先生の還暦コンサートで一度だけ再結成して演奏をしてくれたが、今回また集まってくれた。彼らもその発足時は皆高校生だった。東京都の高校生合同バンドを私が指導したのをきっかけにもう少しだけ私と音楽を創りたいと集まった仲間が創設したバンドだ。ひとときは東京を代表する一般バンドとして全国大会にも3度出場し、たくさんの思い出を作ってくれた。そんな素晴らしいバンドなのにわがままを言って引退させてもらったのは、私は明治の子供たちに全力を注ぐべきだと感じていたからだ。日曜日の練習など本来の明治高校の練習を犠牲にしなければできなかったことがいつも心に引っかかっていたからだ。そんなふうにたくさん迷惑をかけたのにこうして歴代のメンバーが集結してくれることは感謝しかない。歳を重ねた分、以前よりグッと深みの増した演奏ができるはずだ。

さてこの歳になって（29歳だが！）悟った真実がある。それは私が好きなのは吹奏楽なんかじゃないって事。いつまでたってもどんなに疲れていても消えない、この心の中の強烈なエネルギー源はただひとつ、仲間の「キラキラの笑顔が見たい」という欲望でしかない。そのひとつの手段が私の場合「音楽」なんだということ。結局「人」が好きで人を喜ばせたいというのが私の原点だということに気がついた。還暦とはもう一度人生を始めるという意味もあるようだ。もう一度「人」のために生きる人生をやりきろうと決めた。

本日はご来場ありがとうございます。

明治大学付属明治高等学校吹奏楽班OB・OG

前川　倫輝

本日はお忙しい中「鈴木正人THANKSCONCERT～還暦直前記念演奏会～」に足をお運びいただき誠にありがとうございます。
今回の演奏会を立ち上げるにあたって、100名近くの明治高校吹奏楽班のOB・OGより参加希望の連絡をいただき、改めて鈴木先生の厚い人望を実感した次第でございます。
コロナ禍で人と人との繋がりが減ってしまったこのご時世において、こうして再び懐かしいメンバーと演奏ができる機会となり、大変嬉しく思います。
本演奏会開催にあたってご尽力いただいた関係者の方々、合同演奏会という形でご協力いただいた元東京正人吹奏楽団の方々、そして本日、ご来場いただいた皆様にこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。最後までどうぞお楽しみいただければ幸いです。

東京正人吹奏楽団
第5代団長（1995年～2010年）

冨田　順一

皆様ご無沙汰しております、東京正人吹奏楽団の冨田です。ご来場誠にありがとうございます。
まずは、この度還暦をお迎えになる鈴木先生に団員一同心よりお祝い申し上げます。そして私達東京正人吹奏楽団も12年ぶりに復活致しました。
今回のコンサート開催にあたっては、コロナ禍に加え団員の生活環境も変わり色々と勝手が違って苦労する場面もありましたが、何とか本日を迎えることができました。これもひとえにご老体？に鞭打ってご指導頂きました鈴木先生を始め、団員のご家族のご理解・ご協力があってこそと感じております。ありがとうございました。
本日は12年振りのコンサート開催ということで至らない点が多々あると思いますが、現役時代同様団員一同心を込めた演奏をいたしますので最後までお付き合いのほどよろしくお願い致します。

Program

第Ⅰ部
明治大学付属明治高等学校
吹奏楽班ＯＢ・ＯＧ

イーストコーストの風景（Ｎ．ヘス）

プスタ（Ｊ．ヴァン＝デル＝ロースト）

カンタベリー・コラール（Ｊ．ヴァン＝デル＝ロースト）

アルメニアン・ダンス パートⅠ（Ａ．リード）

◆ 休憩（15分間）◆

第Ⅱ部
（復活！）東京正人吹奏楽団

序曲「春の猟犬」（Ａ．リード）

シンフォニア・タプカーラ（伊福部昭）

◆ 休憩（15分間）◆

第Ⅲ部
合同ステージ

ドラゴンの年（2017 版）（Ｐ．スパーク）

イーストコーストの風景（N.ヘス）

ナイジェル・ヘスがアメリカ東海岸を訪れた際の印象を基に、ニューヨークとその周辺の土地をテーマに「３つの小さな絵」をイメージして作曲された組曲であり、氏の最初に出版した吹奏楽曲である。
１.シェルター・アイランド
シェルター島はその美しい景観から人気の観光地であり、ヘスは自身の体験から冬のシェルター島を描いた。風雨や海霧を表す木管に始まり、金管群の響きが暖かみや幸福な心象を示す。多様な楽器の音色とダイナミクスの起伏豊かに音楽が進み、徐々に雄大さをまして華やかなクライマックスへと到達する。
２.キャッツキルズ
ニューヨーク市街から２００kmほど北に位置し、美しく豊かな自然と水を守り続ける自然保護区キャッツキルパークと、その中心を成すキャッツキル山地が描かれる。コラールに始まり、コルネットが甘美に主題を歌い上げた後、旋律を変奏し一度は高揚するも唐突に静けさへと戻される。再度のコルネットソロから音楽が一層雄大に発展し、堂々たるクライマックスを迎える。
３.ニューヨーク
ニューヨーク市の中でも多様な文化・風俗のすべてが集約された街、マンハッタンがスピード感溢れる音楽によって見事に表現される。鮮烈にモチーフが提示される冒頭から、変拍子を挟みながらも目まぐるしく音楽が進行し、けたたましいホイッスル等も引き連れて一度頂点を迎える。静かでセンチメンタルな場面を挟むやいなや、それを破るパトカーのサイレンを契機に、最後にはスピード感を増し、一気呵成の鮮やかさで曲が締めくくられる。

プスタ（J.ヴァン＝デル＝ロースト）

ベルギーの作曲家ヤン・ヴァン＝デル＝ローストによる楽曲であり、室内アンサンブル編成向けに作曲された後、多数の要望から吹奏楽バージョンに編曲された。「プスタ」とは、ハンガリーを中心として広がる大きな平原の名称でありそこで放浪生活をおくる民族、ジプシー(ロマ)の舞曲が、この曲のテーマである。ジプシー音楽は変化に富むのが特徴であり、『プスタ』もめまぐるしくテンポや強弱を変化させる。魅力的な旋律・和音、快活なリズム、パーカッションの活躍もこの曲の人気の理由である。
第１楽章はゆっくりとした導入に始まり、主要なテーマが徐々にテンポアップしていくチャールダーシュの楽章。第２楽章は木管楽器が奏でるロマの優しく美しいメロディーを基調とした、おだやかな楽章。第３楽章はクラリネットのカデンツァに始まり、快速で勢いのある楽章。途中、どこか寂しげな中間部を挟む、典型的なチャールダーシュ。第４楽章は落ち着きがありながら情感に溢れる高音部の旋律と、これに呼応するかのような低音部の対比から始まり、後半では長調に転調して、疾走感とともに大きな盛り上がりを見せながらフィナーレへと至る。

カンタベリー・コラール（J.ヴァン＝デル＝ロースト）

イギリス南東部にある世界遺産カンタベリー大聖堂は、６世紀～７世紀頃にキリスト教が本格的にイギリスに布教され始めたころからの歴史を持つ、イギリス国教会の総本山である。
息を飲むほどの高さを誇る丸天井、それを支えるために林立している石柱、巨大なステンドグラスの威容は、そこを訪れたヴァン＝デル＝ローストに大きなインスピレーションを与え、その時の印象を基に１９９０年に金管バンド用に作曲されたのが『カンタベリー・コラール』であり、１９９３年には吹奏楽版に編曲された。
終始ゆったりとしたテンポで進行しながら、徐々に壮大なクライマックスへと上り詰めていく様は、まさしく大聖堂の重厚さを表現しており、最後はまるでパイプオルガンのようなハーモニーに包まれた後、静かな響きによって曲を締めくくる。

アルメニアン・ダンス パートⅠ（A.リード）

アメリカの作曲家・指揮者であり、教師でもあったアルフレッド・リードは、２００曲以上もの作品を残す、２０世紀を代表する音楽家の１人である。日本においても今なお、その人気からリードの楽曲は広く演奏されており、吹奏楽界に多大な影響を与えた。
『アルメニアン・ダンス　パートⅠ』は、全４楽章からなる組曲の第１楽章に相当するものである。アルメニアの伝統音楽の父、コミタス掌院(KomitasVadapet)によって蒐集・作曲された５曲から構成されるラプソディ形式で、美しい民族音楽の旋律が器楽演奏曲として巧みに表現される。
・「あんずの木」３つ旋律が組み合わされ、雄弁な冒頭、躍動感あふれるリズム、装飾的な動機によって非常に表現の豊かな曲。
・「ヤマウズラの歌」シンプルで繊細なメロディーによってヤマウズラの小さな足取りが表現される。
・「おーい、私のナザン」愛しの少女を讃える青年の姿を描く抒情的な愛の歌で、舞曲的なリズムや装飾を変拍子によって描くというリードによるアイディアも強く盛り込まれた一曲。
・「アラギャズ山」親しみのあるアルメニアの民謡であり、その息の長い旋律は、アルメニアのアラギャズ山を表すが如く雄大な曲。
・「行け、行け」ユーモラスで軽快な音色を持ち、繰り返される音型が笑い声の表情を音楽的に表現する曲。

序曲「春の猟犬」（A.リード）

イギリスの詩人アルジャーノン・C・スウィンバーンの詩劇『キャリドンのアタランタ』の合唱詩の一節から着想を得て作曲された。この合唱詩の冒頭部“春の猟犬が冬の足音を辿る頃”が曲名の由来ともなっている。
A.リードは「春という季節の若々しい恋を描いた魔法の絵。それを純粋な音楽で表現しようとして、伝統的な三部形式の形をとり、この美しい讃歌は誕生した。スウィンバーンによるこの詩の二大要素“若さ溢れる快活さ”と“優しい恋の甘さ”を相応しいテクスチャーの音楽で描こうとしたものである。」とコメントしている。
曲は急－緩－急の三部形式をとっている。前半は付点八分音符を伴った6/8拍子により待ち侘びた春の訪れへの期待感に包まれる。中間部は愛が時折立ち止まりながらもゆっくりと育まれるように盛り上がり、終始優しい旋律が歌われる。後半は少し暗い冬のような表情を交えたフガートで始まり、期待感を膨らませながら冒頭の旋律へと戻り、中間部の旋律とのポリリズムがあらわれ、喜びに満ちた讃歌はクライマックスを迎える。
春の猟犬はA.リードの数ある吹奏楽曲の中でも、第1部で演奏する『アルメニアン・ダンス　パートⅠ』や『エル・カミーノ・レアル』と並び演奏機会の多い楽曲のため、今回の演奏が２回目、３回目になるという奏者も多くいる。A.リードの作品は向き合うたびに曲の美しさと音楽への真摯な気持ちをもたせてくれる。

シンフォニア・タプカーラ（伊福部 昭）

伊福部昭は北海道釧路町（現釧路市）に生まれ、幼少期に音更村（現音更町）へ移住した。同地でのアイヌの人々や開拓移住者との生活は伊福部の作品に大きく影響を与えた。中学校では友人の三浦淳史（音楽評論家）に勧められ独学で作曲を始め、１９４６年に上京し東京音楽学校（現東京藝術大学）作曲科講師を務め、芥川也寸志など多くの作曲家を育てた。『ゴジラ』など３００本以上の映画音楽も手掛け、２００６年２月８日逝去（享年９１歳）された。
シンフォニア・タプカーラは１９５４年に初稿が発表され、１９８０年の再演に際して改訂された。“タプカーラ”とは広義では“立って踊る”や“踏み舞を踊る”という意味をもつ。伊福部自身も「アイヌへの共感とノスタルジアがこの作品の動機である。」と語っており、幼少期に体験したアイヌの歌・踊り、そして雄大な自然とその自然に感謝と畏敬の念を抱き生活する人々への礼賛が込められている。上京後の４０歳頃の作品であり、遠く離れた北海道への憧憬も感じられる。
１楽章は非常にゆったりとした序奏から始まるソナタ形式に準じた構成となっている。音の跳躍やアクセントにより広大な大地や青々とした木々のさざめきなど、雄大な自然とその中で暮らす人々が表現される。
２楽章はハープの提示する下行音階が全編を通して演奏され、霧の中でかすかに見える山々、水の流れ、吹きすさぶ風、静寂に包まれた自然が表現された非常に美しい楽章となっている。
３楽章でいよいよ“タプカーラ”が始まる。多様なメロディと楽器の組み合わせにより様々な踊りが展開する。伴奏は一貫してどっしりとしたリズムを刻み、さらに反復していくことで高揚感を高め、曲は終止する。当団で取り上げるのは４度目となり、オリジナリティが確立された作品である。

ドラゴンの年（2017 版）（P.スパーク）

ウェールズを代表するブラスバンド“コーリーバンド”の創立１００周年を記念した委嘱作品として１９８４年に作曲され、翌１９８５年にはP.スパーク自身の手で吹奏楽に編曲された。
曲は３つの楽章で構成されている。１楽章のトッカータは鋭い連続音と強く重い単音、即興的なパッセージが繰り返され、竜が暗い洞窟の中でうごめくような情景から始まる。各パッセージが変化をみせながら牧歌的なフレーズや輝かしいパッセージを経て、潮がひくように楽章を終える。２楽章では壮大なハーモニーの後、アルトサックスのソロがあらわれ、イングリッシュ・ホルンやソプラノサックスに引き継がれていく。その後、美しいコラールが粛々と高まり、頂点ではまばゆい朝日のような音楽が奏でられる。次第に落ち着き、フルートとイングリッシュ・ホルンのデュオが冒頭のメロディを再現し、アルトサックスのソロによって深い眠りにつくように2楽章は終わり、切れ目なく３楽章へと続く。１６分音符が絶え間なく演奏される技巧的な３楽章では、速いパッセージと各楽器のソロやソリが繰り返される。トランペットの合図で再現部に入り、コーダでは勇壮なファンファーレが演奏され速度を増しながら華麗に終結する。
初版と改訂版の違いについて、P.スパーク自身は「私自身の作曲スタイルがこの３２年の間で成熟し進化した。（中略）この２０１７年版は、初版に新しい衣服を着せて見た目を取り繕ったものではなく、もし今日の私だったらこう書いただろう、という一つの結果だ。」と解説している。

Members

明治大学付属明治高等学校吹奏楽班 OB・OG

◎ 友情出演
◇ 合同ステージ参加

コンサートマスター　中山 哲兵

Flute, Piccolo

山下 里佳
田口 諒
三苫 美鈴
◇ 青木 美沙
川合 佑香
朝田 眞代
◇ 黒木 茉実
秋好 南緒
藤原 有彩
◇ 大源 萌恵

Oboe, English Horn

◇ 國本 晃澄
◇ 木口 歌菜
横山 可奈子
太田 千裕
◇ 水嶋 さやか
◇ 菅野 歩香

Bassoon

◇ 菅谷 康昭
川崎 泊
小早川 莉穂
◇ 佐藤 杏菜

E♭ & B♭ Clarinet

◇ 村田 祐佳
◇ 落合 裕貴
中山 哲兵
松田 隼汰
市村 広奈
星加 紗彩
◇ 田久 実咲
◇ 谷山 玲奈
岩谷 修二
荒田 夏寧
◇ 野崎 優花
田中 陽菜

Bass Clarinet

◇ 設楽 昌樹
庄司 あおい

Soprano&Alto Saxophone

◇ 松岡 拓人
長澤 美弥
見延 里菜
後藤 花穂
高原 里奈

Tenor Saxophone

◇ 井狩 慶大
◇ 野田 みなみ

Baritone Saxophone

赤星 飛鳥
◇ 新美 麻衣花

Trumpet

◇ 小川 悠一
大野 若菜
神山 優美
◇ 前川 倫輝
◇ 奥田 馨介
木村 花
◎ 井手 康仁
◎ 谷 蒼一郎

Horn

◇ 小林 賢一郎
遠藤 智史
◇ 福川 伸陽
林 茜
◇ 大髙 直哉
◇ 渡邉 大河
宮代 梨央
萩原 瑠也
◇ 土井川 璃月

Trombone

日下部 尚徳
◇ 川島 友彦
◇ 鈴木 玲緒
大内蔵 瑞穂
髙原 智輝
髙安 あずさ
◇ 竹川 佑杜
石神 鈴音
中山 和貴
◇ 金田 美祐

Euphonium

福田 哲史
◇ 髙城 遥香
◇ 古岡 奈緒
◇ 石川 ひより

Tuba

石井 慎也
◇ 上野 純也
大和田 遼雄
淺野 友康

Percussion

◇ 登坂 嘉文
岡崎 孝晴
大澤 公誉
鈴木 將秀
大橋 寛也
◇ 西尾 輝
上田 菜々子
◇ 渡邊 健杜
◇ 吉房 つばさ

Contrabass

相澤 伸
鈴木 萌子

Members

東京正人吹奏楽団

◎ 賛助出演
◇ 合同ステージ参加

コンサートマスター　島崎 和人
合同ステージコンサートミストレス　佐藤 朋恵

Flute, Piccolo

伊沢 裕樹
市川 利枝
◇ 岩下 直子
上治 か葉
◇ 大窪 智美
窪寺 広恵
◇ 小山 直之
杉谷 彩
◇ 戸塚 奈緒
◇ 冨田 亜紀
中野 公平
◇ 平尾 かおり

Oboe, English Horn

磯貝 陽子
◇◎ 木口 歌菜
古川 弘智
中浜 圭

Bassoon

◎ 田中 博
◇◎ 日隈 孝則
村田 愛
金子 美嘉

E♭ & B♭ Clarinet

池戸 野乃子
◇ 大内 理奈
◇ 大原 啓樹
◇ 片山 千尋
◇ 佐藤 朋恵
◇ 島崎 和人
伏見 はるか
◇ 保坂 優太
宮澤 雅子
村田 嘉宏
◇ 渡辺 和巳

Alto Clarinet

浅井 恵子

Bass Clarinet

◇ 安藤 百合子
◇ 岩田 さとみ
◇ 越後 友太
◇ 中村 拓也

Soprano&Alto Saxophone

◇ 磯貝 寛
◇ 冨田 順一
◇ 松岡 拓人

Tenor Saxophone

◇ 川村 真由美
◇ 坂田 宏樹

Baritone Saxophone

◇ 中田 晴美
◇ 矢野 裕理

Trumpet

◇ 小笠原 純也
木村 萌美
◇ 齋藤和昭
◇ 中島 めぐみ
◇ 長洲 紀彦
◇ 松下 友美
◇ 山中 綾乃
吉澤 隆

Horn

◇ 木本 春樹
◇ 権藤 真理子
齋藤 美恵子
◇ 佐々木寛人
竹元 和幸
◇ 東野 光宏

Trombone

◇ 伊原 淳
◇ 岩下 智明
◇ 座間 祐希
◇ 柴﨑 雅之
髙倉 恒
田鹿 裕子
新妻 直子

Euphonium

髙橋 未希
村川 たろう

Tuba

◇ 佐々木 和弘
佐藤 慎太郎
◇ 比留間 敦哉
森 泰範

Percussion

◇ 大窪 大開
佐久間 多絵子
◇ 中野 有子
◇ 登坂 嘉文
平山 史織
山﨑 正樹
山﨑 由紀

Contrabass

◎ 一木 実紀
◎ 山田 大志

Harp

◎ 松本 花奈